



## 今回のテーマ

# 研修を授業改善につなげる工夫

授業研究の目的は、日々の授業を改善することにある。

しかし、指導案の作成や教材の準備などには手間や時間が掛かり、ともすれば研究自体が目的化してしまふことになりかねない。今号では、教師の負担を少なくしながら、日常的な授業の改善につなげている研修のあり方を紹介する。

## 事例 千葉県市原市立京葉小学校

# 限られた時間の中で日常的にノウハウを共有

## 指導案の略案化で 教師の負担を軽減

市原市立京葉小学校は、「日常の授業改善」を合言葉に校内研修を行っている(図1)。全担任22人が年1回以上研究授業を行い、事後の協議会で成果や課題を共有するねらいを、鎌田正男校長は次のように話す。

「教師は1年で850時間以上の授業を行います。1コマの授業で少しの工夫をし、それを互いに見合っ  
ていけば、1年間経った時に大きな成長が期待できます」

研究授業の教科は各自で決められ

るが、研修の焦点を絞るため、「学習意欲の向上」「基礎基本の習得」「言語活動の重視」のいずれかの工夫を盛り込む。授業者は指導案を抜粋した略案(図2)を作り、学年会で検討した上で研究授業に臨む。

「詳細な指導案や大掛かりな教材を用意すると、研修自体が目的化し、日常の授業改善につながりにくいものです。研修の成果を毎日の授業に生かすためには、手軽にノウハウを共有できることが大切だと考え、先生方には手の込んだ工夫よりも、すくなく生かせるような工夫を提案して

ほしいと伝えていきます」(鎌田校長)

低学年、中学年、高学年に分かれて行う事後の協議会は原則30分以内とし、授業者の工夫が効果的だったかどうかを振り返る(写真)。参観のみで協議会に参加しない教師は、感想やアドバイスを「コメントカード」に記入し、授業者に渡す。

全員が年1回以上の研究授業を行うことに対しては、当初、教師の間でも戸惑いがあったが、鎌田校長の方針が浸透するにつれて、多くの教師が前向きに取り組むようになったと、研究主任の近藤宏子先生は話す。

「得意な教科ばかりでなく、苦手な教科にも取り組む先生が増え、意欲の高まりを感じます。日々の工夫を重ね、研修での気付きを反映した結果、自分の授業が良くなったと感じているからこそだと思います」

鎌田校長は、今後について次のように話す。

「子どもに自ら学ぶ姿勢を求める以上、教師自身が学び合う集団にならなければなりません。管理職の助けがなくても、先生方が自立的に授業改善に取り組もうとする意識を根付かせたいと思っています」

## 図1 校内研修のポイント

- ①実施教科の自由化**…教師の内発的な参加を促すため、各自が実施する研究授業の教科を自由とし、教師が自らの課題意識や得意、不得意に応じて決められるようにしている。調整はしないが、結果的に分散し、小学校教師に必要な全ての教科で研修が行われている
- ②工夫ポイントの共通化**…児童の課題を基に設定した「学習意欲の向上」「基礎基本の習得」「言語活動の重視」の3つの工夫のいずれかを授業に盛り込む（算数一意欲、理科一言語など）
- ③指導案の略案化**…基本的にA4判用紙表裏の1枚の略案とし、本時の位置付けと目標、工夫点、場面展開、時間配分を明記する
- ④事前・事後研修の充実**…研究授業の前には学年会で指導案を検討。事後には、低、中、高の2学年ずつで集まり、研究授業の振り返りを行う。学年を中心に日常的に接する機会が多く、課題意識も近い教師間で行うため、活発な意見交換が可能になる

\* 同校の資料を基に編集部で作成

## 図2 指導案の略案(1年生 算数)

1年2組 算数学習指導案(略案)

指導者  
平成24年11月 27日4校時

- 単元名 ひきざん(2)
- 単元の目標  
(十何) - (1位数)で、繰り下がりのある場合の計算の仕方を理解し、計算できる。
- 本時の指導(2/12)  
(1) 本時の位置  
本単元までに、児童は、繰り下がりのないひき算と繰り上がりのある足し算を学習してきた。繰り上がりのある足し算では、10の補数を意識して、加数を分解してたず方法を学んできた。ほとんどの児童が、この方法を理解し、できるようになってきたが、十分に理解ができていない子が数多い。  
本単元では、繰り下がりのあるひき算の仕方を学習する。本時は、その1時間目なので、どのように計算したら答えが出るのかまず自分なりの方法でやってみる。数えひき、減加法、減減法などいろいろなやりかたが出てきたらその中から手順の良い計算の仕方を見つけさせる。  
次時は、一番手順良くできた減加法の手順を再度確認し、計算の仕方を唱えさせるようにし、計算技能の定着を図る。
- 本時の目標  
(十何) - (1位数)で繰り下がりのあるひき算について、計算方法を見つけることができる。  
(3) 本時で工夫していること(基礎基本の定着)  
本学年の児童は、繰り下がりのないひき算は、ほぼできるようになったが、数図ブロックを使わないとはっきりしない子や数えひきをしている子が数多い。また、繰り上がりのあるたし算もほとんどの児童が数図ブロックを使ったり、図を書いたり、サクランボを書いたりして10の補数を使って計算することが一応できるようになったが、時間がたつと忘れてしまっ、支援の必要な子も数多い。  
本時では、13-9の計算を数えひきでも減加法でも減減法でもまず自分のできる方法でやってみる。そして、自分の見つけた方法を数図ブロックや図や言葉を使って説明できるようにしたい。発表し合ったり、友達ややり方を実際に行ってみたりする活動を通して、減加法の手順よきを感じ取らせるようにしたい。数図ブロックを移動させたり図に表す活動をしてみて減加法が確かに速く簡単だと納得できれば、今後使えるようになるだろうと考える。
- 本時の展開

時配	学習活動と内容	指導の方法○と評価◎
5	1. 素材を提示する。	○素材から、わかっていること、聞いていることを発表させる。

## 写真 事後の協議会(1年生 算数)



教師の年齢構成が20~30代前半と50代に二極化する中、若手教師がベテラン教師に対して、積極的に意見を述べる場が何度も見られた。時に厳しい意見の応酬になるが、各自が互いの意見を認め合いながら、授業改善へとつなげている

13-9は、どのようにけいさんすればよいだろう

10	4. 自力解決をする。 はじめに数図ブロックを13こ置く。 考えられる取り方 ①  〇〇 10のまとまりからとる。 ②  〇〇〇〇 ③  〇〇〇〇 ④  〇〇〇〇 1こずつとらえてとる。	○数図ブロックを用いて、はじめの数を10のまとまりとばらばらの数図ブロックで表すようにする。 ◎13個の数図ブロックのどこから9個取ったらいかを考えるようにする。 ◎数図ブロックを操作して、計算方法を見つけることができる。 ○できた児童には、説明ができるように発表ボードに図に書いたり、言葉で表現したりさせる。
10	5. どのように計算したか発表する。 ・どのように9個取ったかを発表し、考えを話しあう。 ①の方法は、10から9を取るので、1回でばつととれるから、簡単で速くてわかりやすい。	○数図ブロックや言葉を使って計算の仕方を説明させる。 ◎減加法でない方法でした児童にも、減加法の操作を経験させ、よきを実感させる。

指導案の略案はA4判用紙の表裏両面から成る。「本時で工夫していること」を必ず入れ、工夫ポイントには参観者に分かりやすいように下線を引く。全てを参観できない教師は、この略案を基に工夫ポイントの部分が行われる時間帯だけを見学できる \* 同校の資料を抜粋して掲載

## 千葉県市原市立京葉小学校



◎1967(昭和42)年開校。  
基礎・基本の向上と学び合い、高め合う授業実践を目指す。東京湾に面した学区ならではの「海苔づくり」体験学習をはじめ、親善相撲大会、敬老会など、地域との連携も重視している。

校長 鎌田正男先生  
児童数 648人 学級数 22学級(うち特別支援学級1) 教員数 29人  
所在地 〒290-0038 千葉県市原市五井西3-9-2  
TEL 0436-21-1725  
URL <http://www.ichihara-chb.ed.jp/keiyo-e/>  
公開研究会 未定



近藤宏子  
市原市立京葉小学校研究主任  
「先生方が話し合う場面では、ベテラン、若手を問わず、先生方が話しやすい雰囲気づくりを心掛けている」



鎌田正男  
市原市立京葉小学校校長  
「まだ、まさお  
厳しい学び合い、高め合うためには、  
厳しい意見をプラスに受け止めることが大切だと、日々先生方に伝えている」

授業研究に学校全体で主体的に取り組むために「心掛けていくこと」